

第五百一話 留萌沖三船殉難事件（令和7年7月10日）

中尾則幸著『海わたる聲』（柏櫓舎）を知り、ネットで注文して一気に読了した。ソ連の残虐行為については本メモランダムでも取り上げ非難してきたが、改めてその思いを強くした次第である。

本話では、その概要を紹介する。

1 事件の背景

ソ連は日ソ中立条約に違反し、ヤルタ密約を根拠として、昭和20年（1945年）8月9日、対日宣戦を布告。同日、満洲、朝鮮および南樺太への攻撃を開始した。侵攻の目的は、南樺太の獲得と、その後予定された北海道侵攻の拠点確保にあった。

8月11日：東海岸の上敷香・内路を空襲

8月13日：樺太庁長官はソ連軍の攻撃から避難させるため、長官命令により老人・児童・女性を本土に送還。大泊港から宗谷丸・小笠原丸・第二新興丸・泰東丸等に分乗させて南樺太から緊急疎開、

8月14日：ソ連軍、西海岸の恵須取に上陸開始

8月15日：ポツダム宣言受諾、終戦へ

8月17日：太平洋炭鉱病院の看護婦23人が集団自決（うち6人死亡）

※真岡郵便電信局事件も含め、メモランダム第261話を参照

8月23日：ソ連軍、留萌に上陸作戦を計画

※スターリンはトルーマンに対し「留萌と釧路を結ぶ線以北の占領」を要望したが、トルーマンは拒否。同22日午後、スターリンは北海道占領計画を放棄。しかしその情報は潜水艦には届かなかった可能性あり。



2 三船の殉難

（1）引揚対象者

当時の樺太在住邦人は約40万人。引揚の対象は、65歳以上の高齢者、14歳以下の児童・幼児、40歳以下の婦女子、病人等であった。

（2）引揚船とその運命

- ・小笠原丸（海底ケーブル敷設船・1397トン）

8月21日23過ぎ、大泊港を出港。1514人が乗船。稚内で一部下船者があり（中には後の横綱・大鵬も含まれる）、633人が乗船を継続。

22日4時22分、ソ連潜水艦の魚雷（3発？）が命中し撃沈。救助者はわずか20人。

- ・第二新興丸（海軍特設砲艦・2500トン）21日9時頃、大泊港を出港。約3600人が乗船。22日5時30分頃、浮上した潜水艦と交戦し、危機を脱して留萌港へ避難。3219人が下船。

- ・泰東丸（貨物船・887トン）21日11時頃、大泊港を出港。22日9時52分頃、潜水艦により撃沈。乗船者約780人のうち、667人が死亡。

（3）殉難者の遺体の一部は漂着したが、多くは無縁仏として葬られ、遺骨が肉親のもとに戻ったのはごくわずかである。

3 真相究明の活動

（1）生存者の証言収集、ソ連戦史資料の調査、遭難地点の潜水調査（海自に依頼）実施。

（2）他国軍はすでに戦闘行動を停止していたため、攻撃はソ連軍の仕業と考えられる。戦史調査の結果、攻撃した潜水艦の艦名（L-19、L-12）が判明。ソ連戦史研究所からも、太平洋艦隊の行動であるとの回答を得た。艦隊命令には「航行中の敵船舶すべてを撃滅せよ」と記されていた。

4 論点

- ・民間船への無差別攻撃は国際法違反である。しかし、米軍も類似の軍事行動を行っていたこと、三船が非武装だったか否かについても議論がある。・北海道ではソ連軍との戦闘状態にあったとの指摘もある。・国会答弁書では、ソ連潜水艦の行為を「暴挙」とは認めていない。
- ・樺太引揚三船遭難遺族会による謝罪と補償の要求に対し、政府から誠意ある回答はなされていない。
- *あまり知られていない「留萌沖三船殉難事件」を多くの人に知っていただきたい。

（了）